令和4年2月吉日

TQ、しませんか？

www.jomaca.join-us.jp/tq.pdf

TQ事業協会運営部長
山田　学（まなぶ）ⓒ

本稿にご紹介する技術は、やまとことばの声と、深い関係にあります。ので、旧かな表記させていただきました。

〈氣功の工業化〉

TQ技術、といふものがあります。その効果効能について、この50年間、さまざまな方がたが、驚きました。TとQに、深い意味は、ありません。先行した研究への、敬意です。(後述)

ロックフェラー財団を中心とする、医療体制に、対し、中国、インド、チベット、イスラムに、伝統の、アジア診療が、あります。アジア診療の現象の、その奥に、17世紀からの欧米学問では、理解できぬ、構造や本質が、ある。人間や他生物の、生理（生命の理（り））の、絶妙さです。

アジア診療のうちに、氣功といふものが、ある。さて、「氣功師が、物質に、氣を込める過程」。それには、認識の理（り）の面と、生理の面と、物理の面が、あります。わたくしの実父・山田俊郎（としを）（1926～1996）が、偶然、この物理の面のみを抽出する、〈ある機械〉を、発明したのです。氣功師の、天性も、修業も、必要とせず、氣功師以上のことが、可能なのです。わりと、短時間、低費用です。すなはち、わがTQ技術は、〈氣功の工業化〉です。〈薬石（やくせき）の人工生産〉です。個人から、地球まで、応用が、考へられます。健康。住居。食物流通。農業。環境。広域となれば、〈氣功の工業化〉は、〈風水の工業化〉でもある。アジア診療の結晶点、ともみなしうる。

TQ技術は、人間や他生物を、看護する技術です。

人間や他生物がゐる空間、それを調整し、看護します。

特殊に加工した（＝〈ある機械〉により、氣を込めた）物質、それを空間に置き、空間を調整します。

転ばぬ先の杖（つゑ）

TQ技術の効果効能について、素直に悦んでくださる、多くの民衆がゐます。

一方、素直には認知できぬ、一部のインテリの方がたも、をられます。無理も、ありません。17世紀からの、欧米学問にとり、アジア診療全般に、理解できぬ部分が、ある。ましてや、アジア診療の結晶点、ともみなしうる、わがTQ技術が、今までの学問の、大盲点こそを、鋭く突いてしまつた。

ここにおいて、TQ技術の営業を、まづは、素直な民衆向けに、たとへば、一定の芸術とともに、進める。それは善いことだと、思ひます。ただし、TQ技術の説明において、なにか、神秘めかし、ともかく、金儲けに走ることは、邪道です。

さて、一部のインテリの方がた向けにも、どういふ有益さを、ご提供できるか。わたくし自身、ある意味、インテリです。

17世紀からの欧米学問にも、不足する部分があり、修正すべき部分がある。アジア診療の現象の、その奥に、むしろ、次の学問の可能性も、ある。

かういふ意識転換こそは、転ばぬ先の杖として、有益だと、思ひます。なぜなら、あと10年のうちに、UFOや異星人についての情報も、公開されると、予想されるからです。ＵＦＯや異星人にとり、ヨガやアジア診療のやうなことは、むしろ、常識のやうです。

TQ技術は、〈氣功の工業化〉であり、〈薬石の人工生産〉であり、物性論（物質の性質についての論）の、問題です。かのＵＦＯは、その機体の物性にこそ、重要な秘密が、あるやうです。わたくしの印象では、さまざまな方がたに、驚かれてきた、わがTQ技術も、UFOに比ぶれば、序の口の技術、にすぎません。

橋渡し

転ばぬ先の杖として、日本列島にて、アジア文化から、欧米学問への、橋渡しを、いたします。

今までの物理学や生理学に、ふたつの新しい概念を、提唱いたします。TQ技術を、健康平和な、現実の認識の、学問として、説明するためです。

①〈酵素活性場（ば）〉といふ概念。物理学の概念、〈場field（フィールド）〉（空間の性質）に、第五種めの〈場〉として、提唱します。生命反応にて、酵素を活性化するなどの、〈場〉（空間の性質）です。電磁場とは区別される、生命に直結する〈場〉です。

②〈生命促進性〉といふ概念。さまざまな物性（物質の性質）に、追加し、まうひとつの物性として、提唱します。あらゆる物質には、生命を促進したり、しなかつたりする性質が、ある。自然への感性が深い、日本人が、「石などにも、こころがある…」と、詩的に、表明したくなるあたりを、学問と整合させる、新概念です。

①②の組合せ。TQ技術は、

物質の②〈生命促進性〉を、〈ある機械〉により、加工する。(氣を込める過程に同じ。)＝〈TQ処理〉と呼ぶ工程

その物質を、人間や他生物のゐる空間に、適正に配置し、空間の①〈酵素活性場〉を、調整する。＝〈TQ適用〉と呼ぶ現場対応

かうして、人間や他生物を、看護します。

学問として、橋渡しの最終目標は、西洋の〈場〉の概念と、東洋の〈陰性陽性〉の表象の、区別と連関の、解明です。

わたくしは、TQ技術を説明する困難の、過程にて、縄文人が、土器や土偶に表明したと考へられる、生理感覚ないし物理感覚など。これに、強烈に、惹かれました。17世紀からの欧米学問とは、無縁の、縄文人は、かへつて、①〈酵素活性場〉②〈生命促進性〉にあたる感性を、常識としてこそ、生き抜いてゐたのではないか。ので、わたくしどものサイトを、ＪＯＭＯＮ(縄文)あかでみぃと、命名しました。また、原始人のアニミズムについて、〈酵素活性場の予感〉と、規定するやうになりました。

一方、人間や他生物の健康と、音波・超音波や、各種電磁波や、微弱放射線などが、どう関係するか。さまざまな研究があり、わたくしも注視してをりますが、まだまだ、今までの学問から、抜け出てをらず、残念ながら、わがTQ技術の本質には、直結してまゐりません。

量子力学の「波動関数」も、ことばとして、ふりまはされますが、約100年前の、量子力学創始期に、指摘された矛盾が、解決されぬまま、先送り状態にある。宇宙物理学の小谷太郎先生らが、やうやく、実状を素直に、告発され始めてゐます。(小谷太郎『言ってはいけない宇宙論物理学7大タブー』幻冬舎新書2018年・参照)

以上の理由により、TQ技術は、「波動」なる流行語を、用ゐません。

TQ技術に接し、思はず、「エネルギー」と呼びたくなる人も、多いやうです。その、効果効能体験から、でせうか。非学問の、民衆語は、ともかく、TQ技術の説明にふさはしいのは、「エネルギー」より、〈場〉なのです。〈酵素活性場〉の実現による、生命調整です。

TQ技術に、似てゐるが、一歩だけ、今までの学問に近い技術も、話題となつてゐます。電子、水素分子、微生物により、説明できる。(内海 聡・松野雅樹・小鹿俊郎(としらう)『うつみんの凄すぎるオカルト医学まだ誰も知らない《水素と電子》のハナシ』ヒカルランド2017年・参照) とくに、小鹿俊郎氏の「メビウス・ウォーター」は、全方位から、微生物を働かせた結果であり、TQ技術の、隣接分野と、言へませう。ただし、わがTQ技術は、微生物を一切、用ゐぬ。そ

のあたり、実に興味深い、学問最前線です。なほ、本の副題に、“オカルト”とありますが、神秘といふことでない。天然の本質であり、むしろ、次の学問に属する、といふことです。

〈TQ処理〉

以下、〈TQ処理〉と呼ぶ工程です。

〈ある機械〉＝TQ処理装置といふ、物理的な装置を、用ゐます。

たとえばここに、ある、健康に良い物質があり、これを、〈元〉の物質とします。次に、〈元〉の物質とは、化学成分として無縁な、物質があり、これを、〈先〉の物質とします。ここでは、〈元〉の物質を、肝臓のための漢方薬としませう。〈先〉の物質を、化学成分として無縁な、ステンレスとしませう。

TQ処理装置に、水を張ります。今までの学問は、火にとらはれてゐる。TQ技術は、行雲流水（雲ゆく、水流る）の方向です。人間も、海水中生物から、進化し、今も、大氣中の、H_2O分子団と、おつきあひしてゐる、生理です。

TQ処理装置の、水内の一部に、〈元〉の物質、肝臓のための漢方薬を、置きます。水内の他の部に、〈先〉の物質、ステンレスを、置きます。一定時間、TQ処理装置に、きまつた作動を、させます。

すると、なにが、どうなるか。

先にご提唱した、②〈生命促進性〉には、質と、向きと、強さが、あります。

〈元〉の物質、肝臓のための漢方薬には、〈生命促進性〉の質が、あります。この質を、〈元〉の物質の、型とも呼びます。TQ処理装置の、きまつた作動により、〈元〉の物質の型、〈生命促進性〉の質が、〈先〉の物質、ステンレスに、転移するのです。ステンレスの〈生命促進性〉の質、〈先〉の物質の型が、〈元〉の物質の型、肝臓のための漢方薬の、〈生命促進性〉の質と、同じになる、のです。とともに、〈元〉の物質も、〈先〉の物質も、その〈生命促進性〉の、向きと強さが、健康に良い向きの、天然界にて、最強状態と、なります。これらの結果は、半永久的に、固定されます。

かうして、〈先〉の物質、ステンレスの、〈生命促進性〉の、質と向きと強さが、加工されます。（氣を込める過程に、同じ。）肝臓のための漢方薬でなく、この、〈TQ処理〉された、ステンレスのはうを、使用してみても（ステンレスに接した、ただの水を飲む、など）、肝臓のための漢方薬と、同様の、効果効能がある。さういふ体験談が、多く、あります。効果効能の原因は、必ずしも、化学成分ではない。さらにその奥にある、未知の物理なのだ。

〈TQ処理〉工程は、わたくしが父から伝授された、少くとも、1993年以来、実に多くの実施において、一度の失敗例も、ありません。くりかへしが保

証された、現実なのです。この現実が、効果効能の原因について、次の学問こそを、提起してをるのです。

TQ処理装置や、作動担当者を、害さないものであれば、〈元〉の物質は、どんな固体でも液体でもよい。貴重な物質を、選ぶ傾向にあります。〈先〉の物質は、（プラスチック以外の）固体（材質・形状は自由）や、（食塩イオン団のやうな）水溶イオンです。ありふれた、安価な物質を、選ぶ傾向にあります。組合せは、無数です。

〈元〉の物質の型が、〈先〉の物質に、転移すると、書きました。〈先〉の物質の、〈生命促進性〉といふ物性が、根本から変化する。映像のやうな、表面的ななにかのみが、変化するのでない。この理由により、TQ技術は、「転写」なる流行語を、用ゐません。

効果効能の原因は、必ずしも、化学成分ではない。さらにその奥にある、未知の物理なのだ、と書きました。学問も、観測・計測機器も、未発達の現状社会にて、わたくしどもは、かう、推理してをります。効果効能の原因の、その本質は、原子核内部にまでも渡る、超微細な動的立体模様、なのではないか。

なほ、わたくしは、〈TQ処理〉工程を、いはば、鉱物の調理と、みなしてをります。食器などへの、応用もあるでせう。

かつて、フランスのC.L.ケルヴラン先生が、ひろく深い、周到な観察や実験により、多くの状況証拠を、提出しつつ、かう、言ひ出した。

人間生活や、地球の生物系や、無生物系にて、むしろ、常温にて、核融合や核分裂、つまり、原子転換が、多様に、常在するのではないか。

次の学問への、〈TQ処理〉工程の解明は、ケルヴラン仮説と、同方向です。(C.L.ケルヴラン『生体による原子転換』『自然の中の原子転換』桜沢如一訳・日本CI協会1982年・参照)

動的立体模様

人間や他生物の、生理は、絶妙そのものです。未知のことも、実に、多い。

が、あるゆる生命反応の環境には、H_2O分子団と、酵素が、ある。単純な、共通性です。

TQ技術も、先述の「メビウス・ウォーター」も、H_2O分子団や、酵素の、動的立体模様を、調整してゐるのでないか。それにより、生命反応を、調整してゐるのではないか。

H_2O分子団も、酵素も、酸素原子が、含まれる。そして、その立体模様を、形成するに、水素結合が、要点です。

H_2O分子団にて、水素結合は、あるH_2O分子にある、酸素原子と、他のH_2

O分子にある、水素原子の、電氣的な結合です。

酵素＝タンパク質にて、水素結合は、タンパク質のうちの、あるアミノ基にある、酸素原子と、他のアミノ基にある、水素原子の、電氣的な結合です。

H_2O分子団にても、酵素にても、水素結合のあり方の、調整により、動的立体模様を、調整してゐる、原因。それは、実は、酸素原子のなかの、さらに、酸素原子核のなかの、動的立体模様、ではないのか。陽子8個と、中性子8個の、動的立体模様、ではないのか。

〈TQ処理〉済み物質に、接した、H_2O分子団や、酵素。「メビウス・ウォーター」にて、全方位から、微生物を働かせた結果としての、特異な〈水〉。双方とも、原子核内部にまで渡り、推理してはじめて、神秘でない、合理性が、あるのではないか。

〈TQ処理〉済み物質を、人間や他生物のゐる空間に、適正に配置し、先にご提唱した、空間の①〈酵素活性場〉を、調整する。この、〈TQ適用〉と呼ぶ現場対応は、〈TQ処理〉済み物質に、適正な距離にて、H_2O分子団や、酵素を、接しさせ、これらを、活性化することです。

なほ、〈TQ適用〉にて、H_2O分子団や、酵素や、また、生物（とくに、動物）に重要な、食塩などが、一瞬間に、変化する。この、空間の〈酵素活性場〉の現象と、一方、〈ある機械〉抜きには、ありえない、〈TQ処理〉工程による、物質の〈生命促進性〉への、加工は、まったく別のことです。〈TQ適用〉と、〈TQ処理〉を、混同し、〈TQ処理〉済み物質に、なにか他の物質を、接しさせ、それのみで、〈TQ処理〉と同等のことが、起るのではないかと、“期待”する人も、ゐますが、〈TQ処理〉工程は、そんなに、簡単なことではありません。

以上、物質内の、微細な動的立体模様が、合理性の概念でせう。AIやIoTなどの応用が、盛んとなる時代だからと言つて、TQ技術は、「情報」なる流行語を、用ゐません。

昔のこと

父は、1971年、名古屋大学農学部のある研究室を、訪ねた。山下昭治先生が、をられた。ここは、戦前の東京大学から続く、植物の花が開く時に、どういふ物質が、関与してゐるかの、研究です。その物質は、T（Tocopherol（トコフェロール））と、Q（Quinone（キノン））であると、1960年代後半に、突きとめてゐた。しかし、TとQの、実に微妙な濃度変化により、生命反応のあり方が、大きく、変動してしまふ。さう、深く、悩んでもゐた。父は、戦中に、東京工業試験所にて、化学実験の、訓練体験も、あつた。この立場から、父による研究協力が、開始

された。

2千本の試験管を用ゐ、TQ濃度変化と、生物（イトミミズを、用ゐた）の、生命反応のあり方の、関係を検証した。1度めに、一定のデータが、得られた。念のための、2度めには、データが、まったく狂つた。事態が、さっぱりわからず、思ひ直し、新品の試験管2千本にて、3度めには、1度めと、まったく同じデータが、得られた。

まったく意外な結果に、父が、周到かつ柔軟な、推理をした。有機物である、TとQの効能が、無機物である、試験管のガラスに、転移したのではないか。化学成分として無縁な、転移現象の、発見です。

生来の、技術屋である、父は、転移させる技術を、追求した。TQ濃度変化と、生命反応のあり方の、関係データには、生命反応がもっとも活性化する点が、あり、K点（kinematic（キネマティック））と、命名した。一方、生物が無生物化してしまふ点、それもあり、S点（static（スタティック））と、命名した。K点の効能や、S点の効能を、安定した物質に、転移させ、固定することに、成功した。安定した物質としては、クエン酸第二鉄などが、選ばれた。効能を固定した、〈原液〉を用ゐる技術が、開始された。

山下昭治先生らの、貴重な生物化学研究に、協力しつつ、まったく意外な、化学を超えた、物理の、転移の現象を、発見し、また、転移の技術を、開拓したのは、父であり、山下昭治先生ではありませんでした。父から山下先生に、ある〈原液〉500ccを提供したと、父はわたくしに、証言しました。そのうち、大手商社や、大手流通業が、この技術の社会化を、急ぎ、山下先生の手元にある〈原液〉が、ひとり歩きしてしまひました。父は、冬も暖い沖縄に移住し、〈TQ適用〉として、養殖業や、農業などの、現場研究を、地道に続けました。そのうち、TとQそのものも、〈原液〉そのものも、必要とせぬ、TQ処理装置を発明し、〈TQ処理〉工程を、発明したのです。つまり、すでにわたくしどもは、TとQそのものも、必要としないのだが、TQ技術と呼称するのは、先行した、山下昭治先生らへの、敬意です。

父の関与せぬところにて、山下先生周辺に、「πウォーター」などの呼称も、発生した。「二価三価鉄塩」なる説明も、ひとり歩きした。この説明、実は、父による虚偽です。TQ技術への、ある社会的な捜査もあり、ともかく、研究に没頭したい父は、目くらましの虚偽を、投げつけたのです。なのに、この虚偽説明にて、特許取得した方まで、現れ、事態は混乱しました。父に代り、お詫びいたします。

「πウォーター」などの噂として、「〈原液〉在庫が、底をつきはじめた…」など、わたくしも、聞いたことがあります。しかし、当方の手元には、父が生

産した〈原液〉が、かなりの量、在庫されたままです。〈TQ処理〉工程が発明され、〈原液〉は、ひとつ前の技術として、使用する必要が、なかつたからなのです。信用できる関係者に、この〈原液〉をご提供することも、考へ始めてをります。

理念・規律・具体活動

〈酵素活性場〉も、〈生命促進性〉も、次の学問への、ご提唱であり、客観的な計測法は、未確立です。わたくしには、さまざまな計測機器や、振動機器の、世界動向に詳しい、友人もをり、それなりに、世界動向を、注視してをります。が、当面は、中国のフーチ（振り子）を用ゐる、自身の、主体技能を、もっとも信用してをります。フーチの原理は、〈酵素活性場〉がある、といふ刺激に対する、人間の生理的反応であると、考へられます。

わがTQ技術の現実に比べ、学問も、法律も、情報戦も、TQ技術をまともに活用できるやうには、なつてゐない。素直に悦んでくださる、多くの民衆にも、素直には認知できぬ、一部のインテリの方がたにも、今に可能な、有益さをご提供してゆく、営業。これを、TQ技術運動と、呼びませう。まづ、時代観として、表明するなら、19、20世紀の、電磁場応用から、21世紀の、〈酵素活性場〉応用へ。TQ技術運動は、新産業運動です。個人から、地球まで。健康。住居。食物流通。農業。環境。

しかし、TQ産業以前に、全人民ご自身にて、自然治癒力を全開してゆかれるやう、おすすめする。これが、全人民への有益さの順序だと、わたくしは、想ひます。TQ産業は、環境空間を調整する、看護です。野性の復興です。看護以前に、必要なことは、保健の主体技能です。ですから、わたくしは、本稿以前に、次をもおすすめいたします。（令和6年12月追記）

〈はるかな健康平和への祈り〉ひとりひとり迷ひの近代から脱出する提案
表紙 http://www.jomaca.join-us.jp/inori_fine.pdf
本文（7枚） http://www.jomaca.join-us.jp/inori.pdf

これは、ヨガの沖 正弘師（1919～1985）に、わたくしが学んだ、根源論理に、わたくしの社会認識を、接続させていただきました。自然治癒力の実態は、次の三者であると、わたくしは考へます。全身のミトコンドリア連関。常在微細系（細菌とウイルス）の調和。〈酵素活性場〉。人生と、地球と月の系。その、認識の理と、生理と、物理を、しだいに、しだいに、理解してゆく。山や、海や、原（はら）の、形態。自然の形態。それは、物理や、生理の、あらはれなの

です。

〔TQ技術運動の理念〕

〈氣功の工業化〉たる、TQ技術を活用し、日本人民と、地球人民に、今に可能な、有益さをご提供してゆく。21世紀の、〈酵素活性場〉応用として、個人から地球までの、新産業を興す。(健康・住居・食物流通・農業・環境)

〔TQ技術運動の規律〕

全人民ご自身が、自然治癒力を全開してゆかれることを、優先し、個人から地球まで、今に可能な、環境空間の調整により、看護させていただく。TQ技術運動に参画する、運動仲間（個人と団体）および顧客を、TQ事業協会と、総称させていただく。TQ技術運動の幹部が、TQ事業協会運営部を、組織する。TQ事業協会運営部長は、山田 学である。(次代に交替するまで。）〈酵素活性場〉〈生命促進性〉にあたる感性を、常識としてゐたらしい、縄文人のやうな人を、今に探し、尊重する。TQ技術運動に対する、今の社会なりの抵抗へは、柔軟に対応させていただき、無理なく、無駄なく、縮小していただく。TQ技術運動にて生じた利益は、TQ技術運動の拡張のため、有効活用する。健康平和な、現実の認識を、追究する。〈TQ処理〉工程は、事業機密です。

〔TQ技術運動の具体活動〕

ひろい方がたからの、自主的なご提案を尊重しつつ、〈TQ進化ひろば〉として、なめらかにやりとりしつつ、TQ事業協会運営部から、具体活動を、認可させていただきます。顧客と顧客に近い運動仲間の感性を、尊重しつつ、具体活動の修正を、〈TQ展開〉管理会議が、決定します。〈TQ展開〉は、顧客から、社会中枢へ、次を、考慮することです。普及対象→普及方法→普及状態→製品開発→技能開発→技術開発→学問開拓→法律改善→情報戦。普及対象を、どうするか。普及方法を、どうするか。実際の普及状態は、どうか。どういふ製品を、開発していくか。(TQ象徴となる、中心の製品開発と、周辺の製品構成。）〈TQ処理〉した製品を、各種現場にて使ふ。(〈TQ適用〉）それにあたり、人間において、どういふ技能を、開発するか。各分野の専門技術群、それらとも組合せ、どういふ技術開発を、していくか。次の学問を、どう開拓するか。TQ技術運動が、保護され推進されるやう、法律改善を、どう実現していくか。TQ技術運動に抵抗する、国際的な情報戦に、どう賢明に、応戦していくか。

さて、〈TQ処理〉工程に、責任をもつと、社会の水面下のしくみが、観察されます。わたくしもかつて、社会理解、精神が、行き詰り、高橋五郎『天皇の

金塊』(学習研究社2008年) などに、ひろく深く、啓蒙されました。ともかく、TQ技術の将来が、不安で、将来への、事前の論理解決を、優先させていただきました。貴重な顧客の方がたへの責任を、わたくしが直接、とらず、TQ技術運動への信用を、低下させてしまふことも、ありました。むろん、TQ事業協会運営部長の、次代のため、若い世代を、厳格に、修業させねばならぬ。ここに、本稿にて、本格出発させていただきます。TQ技術運動に、希望を感ずる方がたは、まづ、本稿を、どんどん、どんどん、ひろめていただけませんか。一定の意識転換さへ、あれば、行き詰りの地球、でない。なしうることが、あまりにも豊かな、地球です。

本稿は、文字ばかりですが、わかりやすい、事実報告、写真、動画なども、みなさまのご協力を、いただきつつ、増やしてまゐります。

今までは、TQ技術運動の将来のため、冷徹そのものにて、緊張してまゐりました。今、ふと、軽妙に、呼びかけさせていただきます…

TQ、しませんか？

山田 学連絡先
(メール) arigatou@image.ocn.ne.jp
(FAX) 045-330-1487
(郵便) 〒236-0014横浜市金沢区寺前2-20-14-501